

接頭辞を持つ古代英語派生動詞

荒 井 義 明

1.1. 語彙論

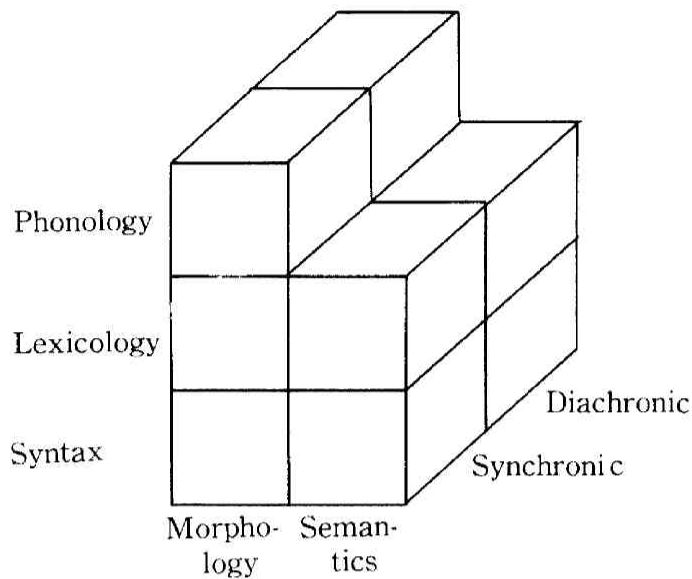
言語の構造を取扱う文法の領域は、伝統的に、音韻論、形態論および統語論の三部門に分けられる。音韻論は、音韻の体系を分析する部門、形態論は語の諸範疇と語の形態的内部構造を取扱う部門、統語論は文や句の形態的内部構造を取扱う部門とされる。

一言語を構成する語の総和、あるいは一人の個人や著書、またはある社会の用語範囲を語彙という。この語彙を研究対象とする言語学の分野を語彙論 (lexicology) という。文法と語彙論の特色について、Henry Sweet は、「文法は言語の一般的事実を扱い、語彙論は特殊な事実を扱う。」¹⁾と述べている。また、Ferdinand de Saussure は、「普通に文法と呼ばれるものは、形態論と統語論とを合わせたもので、一方語彙論、すなわち語の科学は除外されている。」²⁾と述べている。これらのことから窺えるように、それ迄の言語学においては、語彙論は文法と対立するものとされて来た。

Stephen Ullmann は、その著 *The Principles of Semantics* で、上述のものとは異った言語学の体系を提示している。Ullmann は、先ず、言語学を音声の言語学的な機能を論ずる部門である音韻論、意味の一単位である語を研究する部門である語彙論、事象間の関係を伝えるある類型に配列された語群 (syntagma) の構造や成分や高次単位を研究する統語論の三つの分野に区分する³⁾。Ullmann は、さらに、言語学を形態、意味、研究法の観点から下位区分して、それを次に示す Ullmann Cabinet と呼ばれる図で表わした⁴⁾。

Ullmann によって、語彙論は、文法と対立するものでなく、文法を構成する一主要部門として位置付けられたのである。そして語の形態的側面のみならず、意義的側面とその両者の関係へと考察が進められたのである。

Ullmann は、語彙形態論 (lexical morphology) は、語幹 (word-stem)



と造語法 (word-formation) を取扱い、語彙意味論 (lexical semantics) は、語の意味と造語の意味的側面を調べると述べている⁵⁾。これによって、語彙論の研究内容が明確にされたといえる。

1.2. 造語論

語彙の増大は、造語 (word-formation) と借用 (borrowing) の二つの方法によって行われる。造語の問題は、前節で見たように、Ullmann によって、語彙形態論と語彙意味論の中で取扱われることが明らかにされた。語彙形態論の一部門としての造語論は、語の構成要素と構成過程を研究対象とする。このことについて、Hans Marchand は、「造語論は、一言語が新しい語彙単位 (lexical unit)、すなわち語 (word) を形成する型 (pattern) を研究する言語学の一部門である。」⁶⁾と定義している。Erhard Agricola (exal.) 編 *Kleine Enzyklopädie, Die deutsche Sprache* では、「造語論は、新語の形成 (Bildung neuer Wörter) に際し適用される原理 (Grundsatz) と方式 (Verfahren) を明らかにし、語の形式が従う法則性 (Gesetzmäßigkeit) を研究する。造語論は、さらに造語に際して用いられる言語的素材 (sprachliches Mittel) を研究する。」⁷⁾と述べられている。また Herbert Koziol は、研究態度について、「多くの同じ性質を持った特殊な場合に等しく現われる全ての言語現象を検証し、説明しなければならないという原則は、文法の他の部門と同様に造語論にも適用される。その上特に語の形成

に際して演ずる同種の現象を考察することが正に造語論の課題である。」⁸⁾と述べている。これらの説明からも窮えるように、語彙論およびその一部門である造語論は、Sweet の見解とは異なって、造語が従う法則（すなわち一般的事実）の解明を目指すものであって、その法則は、文法と同じく閉じた体系をなすものと考えられる。

語の形成の型には、既存の語を利用せず、まったく新たに語を創造する語根創造 (root-creation) と既存の語を利用して新しい語を造る場合の二通りがある。

語根創造は、音を直接に模倣する反響 (echoism) または擬声 (onomatopoeia) と、音を象徴的に模写する音象徴 (sound symbolism) とに分けられる。擬声の過程によって生まれた語を擬声語 (echo word または onomatopoetic word) という。音象徴によって造られた語を象徴語 (symbolic word) という。

既存の語を利用した語形成に、語に接辞 (affix) を添加して新たに語を造る派生 (derivation)、二つまたはそれ以上の語が結合して新たに語が形成される複合 (composition)、二つまたはそれ以上の語が混り合って、各部の組合わせから新たに一語が形成される混成 (blending または contamination)、ある語から接辞と誤認した部分を切り取ることにより新たに一語を形成する逆形成 (back-formation)、語の一部を切除することにより新たに一語を造る短縮 (shortening)、語を書記する際その一部を書いて全体を示す省略 (abbreviation) などがある。

派生、複合、混成、逆形成、短縮、省略によって形成された語を、それぞれ派生語 (derivative)、複合語 (compound)、混成語 (blend)、逆成語 (back-formed word)、省略語 (clipped word)、または切称語 (stump word)、略語 (abbreviation) と名付ける。

派生語を形成するには、接辞を添加する。接辞には、それが添加された位置によって三種が区別される。語の前に添加されるものを接頭辞 (prefix)、語の中に挿入されるものを接中辞 (infix)、語の後に添加されるものを接尾辞 (suffix) という。これらの接辞は拘束形 (bound form) の形態素 (morpheme) であって、接頭辞、接中辞、接尾辞添加の過程をそれぞれ接頭辞添加 (prefixation)、接中辞添加 (infixation)、接尾辞添加 (suffixation) と名付ける。

1.3. 語形成の記述方法

伝統文法における語形成の記述は、構成過程別に、構成要素の結合様式を形態・意味・機能の面から考察する方法を取る。強勢や統語論的考察、通時言語学的考察も取り入れられる。

blackbird について、Otto Jespersen は、*A Modern English Grammar*, Part VII で次のように説明している。すなわち、*blackbird* は、第一の部分が、形容詞、第二の部分が名詞から成る複合語で、形容詞は名詞に対して、付加詞 (adjunct) という通常の関係に立つが、第一要素に置かれる第一強勢で表示されるように、意味の著しい隔離 (isolation) がある⁹⁾。複合語は、ある一定の事物に対する慣習的な名称になったものであって、構成要素の結合が表われる他の意味を放棄する。これが隔離の意味であって、Brugmann が複合語の基準として採用したものである¹⁰⁾。

また、*pickpocket* について、Jespersen は、*MEG*, Part II, Part VII で次の様に説明している。すなわち、*pickpocket* は、屈折語尾のない動詞と冠詞を伴わないその目的語から形成された名詞である。この型の名詞は常に動作主 (agent) を表わす。この様な構成は、古代英語ではまったく知られていないが、ロマンス語には豊富にある。中世英語でこの種の複合語が現われ始めた時に、フランス語の構成にならって作られた様に思われる¹¹⁾。

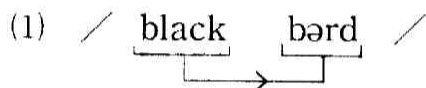
構造言語学においては、言語学固有の領域は、音素論、形態論、統語論の部門に分けられる。形態論は、形態素 (最小の有意味単位) の設定と、その目録の作成を行なう形態素論 (morphemics) と、語の内部における形態素の配列と結合様式を記述する形態素配列論 (morphotactics) から成る。

Eugene A. Nida に従えば、語の内部における形態素の分布には、派生構成 (derivative formation) と屈折構成 (inflectional formation) の二つがある¹²⁾。派生構成は、通常内層的構成 (inner-layer-formation) であり、屈折構成は、外層的構成 (outer-layer formation) である¹³⁾。この派生構成は、Leonard Bloomfield の説明によると、造語法 (word-formation) のことである¹⁴⁾。

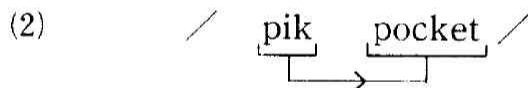
Nida は、派生構成を語根プラス語根構成 (root-plus-root formation) と、語根プラス非語根構成 (root-plus-nonroot formation) とに分けてい

る¹⁵⁾。前者は複合語にあたり、後者は派生語にあたる。派生構成も屈折構成も究極的には直接構成要素分析によって取扱われる。直接構成要素とは、直接有意味な結合の一部をなす構成要素である。構成要素間の機能的関係 (functional relationship) には、内心構造 (endocentric construction) と外心構造 (exocentric construction) がある。内心構造は、さらに等位構造 (co-ordinate construction) と従位構造 (subordinate construction) に分かれる¹⁶⁾。Nida は、内心構造の等位構造を「——」で、従位構造を「→」で、また外心構造を「×」で、表示する方式を試みている¹⁷⁾。

blackbird は、*black* と *bird* という二つの形態素から成り、*bird* は、この構造の核 (nucleus) を成す。*blackbird* という語は、実質上 *bird* と同じ分布類に属する、内心構造の従位構造を持つ語である。上の方式を用いて記述すると *blackbird* は次の様になろう。



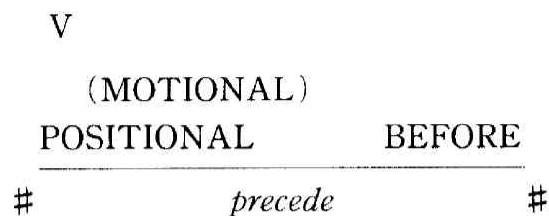
pickpocket は、動詞と名詞から成り、この両者の中で動詞が核を成す要素である。*pickpocket* という名詞は、動詞である核をなす要素 *pick* とは異なる外部分布類に属するから、外心構造である。したがって *pickpocket* の構造は、次の様になろう。



アメリカの構造言語学の行き詰りを打開するために変形という操作を導入してより包括的な言語理論を提唱したのは Noam chomsky であった。彼の標榜する変形生成文法の理論は、理想上の話者・聴者の内在的言語能力を完全に明示的 (explicit) に記述することを意図するものである¹⁸⁾。Chomsky の変形生成文法では、語彙項目 (lexical item) (語に相当するもの) が、統語的操作および意味的操作の基礎単位と考えられている¹⁹⁾。

Jeffrey S. Gruber は、生成意味論 (generative semantic theory) と名付ける理論を提唱した²⁰⁾。この理論においては、深層構造より一層深い、語彙前の範疇構造 (prelexical categorical structure) によって統語的意味は記述を行なうものである。そして語彙項目は、抽象的な範疇に付加される。例えば、語彙項目 *precede* に付加される範疇構造は、次のようになる²¹⁾。

(3)

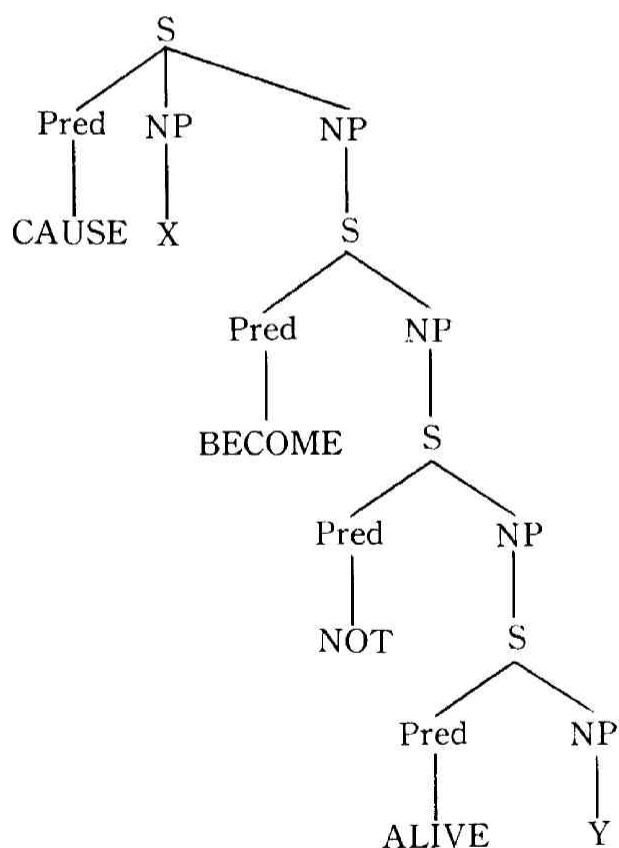


この理論は, James D. McCawley によって更に押し進められて, 意味構造から述語繰上げ (predicate raising) という変形によって語彙前の構造に導かれる²²⁾。

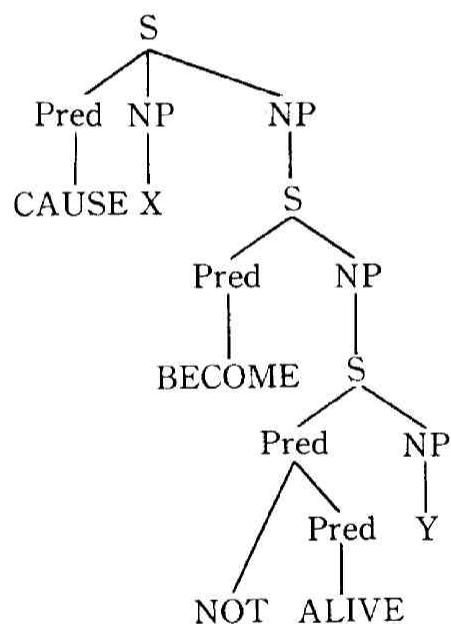
(4) x kill y

という文の意味構造は次で示される。

(5)

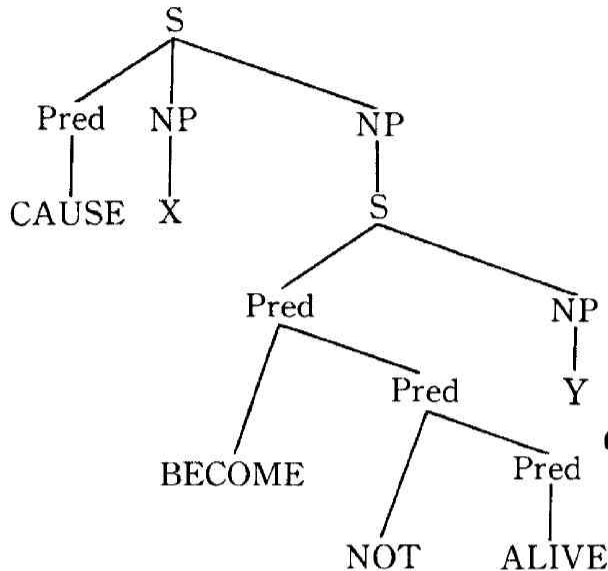


(6)

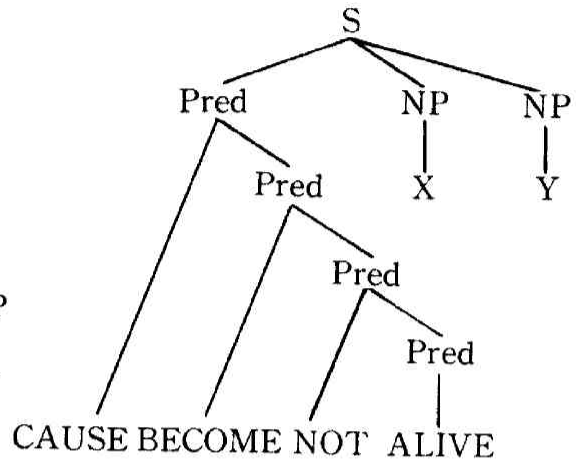


この意味構造に述語繰上げ変形が適用され, 順次 (6) から (8) に至り, *kill* が挿入される。

(7)



(8)



この記述方法は、CAUSE BECOME NOT ALIVE を *kill* で置換えることによって、語彙挿入が行われるのであるが、意味要素の列が辞書的説明と合致するところが魅力的である。(3)の方式も GO BEFORE の意味要素を用いれば、上の方式と同じになる。

2.1. 古代英語の動詞接頭辞

Joseph Wright は、その著 *Old English Grammar* で、次のものを動詞接頭辞 (verbal prefix) として挙げている。すなわち、*ā*, *be-*, *ed-*, *for-*, *ge-*, *mis-*, *of-*, *on-*, *op-*, *tō-*。そして強勢の有無によって分離あるいは不分離になる *æt-*, *ofer-*, *purh-*, *under-*, *mip-*, *uiper-*, *ymbe-* をリストから除いている²³⁾。

R. Quirk と C. L. Wrenn の *An Old English Grammar* では、*ā*, *æfter-*, *an-*, *be-*, *bi-*, *ed-*, *for-*, *fore-*, *forð-*, *ful-*, *ge-*, *in-*, *mis-*, *of-*, *ofer-*, *on-*, *tō-*, *ðurh-*, *under-*, *ūp-*, *ūt-*, *mip-*, *wiper-*, *ymbe-* の 25 を接頭辞として挙げている²⁴⁾。

構造言語学の定義に従えば、形態素とは、最小の有意味単位 (minimal meaningful unit) である²⁵⁾。そして形態素は単独で発することができる自由形態素 (free morpheme) と単独で発することがない拘束形態素 (bound morpheme) に分かれる。接辞は拘束形態素に含まれる²⁶⁾。この観点から見

るならば、上述の接頭辞として Wright の挙げたものは拘束形態素になるが、Quirk の接頭辞として挙げたものの中で、Wright の挙げている接頭辞を除いたものは自由形態素に属する。従って、拘束形態素である接頭辞を持つ動詞は派生語になる。また自由形態素が添加された動詞は複合語になる。

歴史言語学の観点からは、拘束形態素である接頭辞は、元来自由形態素であった不変化詞が、その自律性を失ったために、音韻的变化を蒙り、その結果拘束形態素になったものである。従って機能の面から、拘束形態素である接頭辞と自由形態素で動詞の前に添加される不変化詞を一括して動詞前接 (preverb) として取扱うことができよう。

2.2. 動詞記述のための意味要素

Quirk は、語形成の型を形態変換 (formative conversion) と限定 (modification) の二つに分けている。形態変換は、接尾辞添加やその他の変化を伴う品詞の転換によるものである。限定は、複合と接頭辞添加による語形成である。そして接頭辞による動詞の限定には、接頭辞が持つ副詞的意味による限定と、アスペクトの転換を引き起こす場合があるとしている²⁷⁾。Charles E. Townsend は、動詞前接が動詞を副詞的意味に限定する型を語彙的 (lexical)、動作態様 (type of action, Aktionsart) を転換する型を副語彙的 (sublexical) と名付けている²⁸⁾。

Gregory K. Jember 編 *English Old English, Old English-English Dictionary* には、接頭辞 *ti-* の意味と機能について、“Motion toward, location at; perfective (destructive) with verbs”²⁹⁾ と記されている。この記述から、接頭辞の副詞的限定は、方向、位置に関するものであることが明らかになる。

1.3. で述べた生成意味論の意味構造表示に用いられた、大文字で表記された CAUSE, BECOME, NOT, ALIVE は、意味要素 (semantic element) と名付けられるものである。意味要素を用いて動詞が動詞前接によって、語彙的および副語彙的に限定された派生動詞や複合動詞の語彙前の構造を表示するためには、更に分析を進めて新しい意味要素を設定しなければならない。

Peter Jørgensen は、「或る場所に存在するかまたは留まっていることを

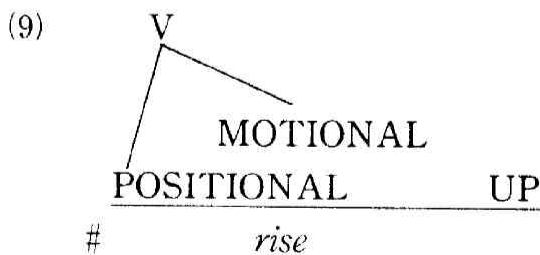
表わす動詞」を静止動詞 (verb of rest), 「場所の移動を表わす動詞」を移動動詞 (verb of motion) と名付けている³⁰⁾。移動動詞は, 動作主 (agent) あるいは主題 (theme) がある場所から他の場所への移動 (translocation) を表わすことがその特質である。静止動詞は, 場所内部 (intralocal) における動作を表わすことがその特質である。

A. V. Isačenko によれば, ロシア語の移動動詞 (Verb der Fortbewegung) には, ИОТИ (=to go) の様な定的動詞 (determiniertes Verb) と ХОДІТЬ (=to go) の様な不定的動詞 (indeterminiertes Verb) がある。定的動詞にあっては, 移動は方向に生ずる。不定的動詞にあっては, 動詞はいかなる方向指示も持たない³¹⁾。井桁貝敏によれば, 定的動詞は, 過程を一定の目標に向かって現実に行われているものとして表わし, 過程の限界の観念が入っている。不定的動詞は, 目標や事態の不定な, またはそれが一定でも, 多くの動作から成るか, 反復的, 往復的なものとして表すのである³²⁾。

2.2.1. 移動動詞の意味要素

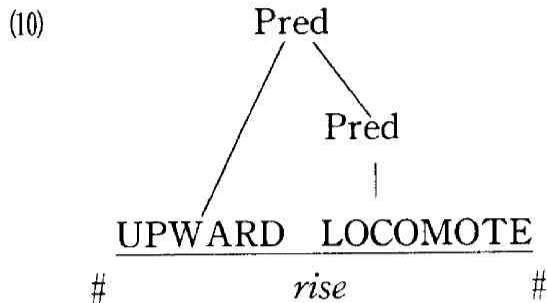
前節で考察したように, 移動動詞の中で定的動詞といわれるものは, 一つ方向への移動を表わすものである。このことから定的移動動詞は, 移動 (translocation) の方向性 (direction) を編入している動詞ということが出来る。したがって移動動詞の方向性に関する意味要素の設定には, 定的移動動詞が編入していると考えられる方向性を分析すれば可能となる。例えば, *rise* は「上への移動 (upward locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。

Gruber は, *rise* は副詞の *up* のみを編入している動詞として, MOTIONAL, POSITIONAL, UP という範疇構造を次の様に記述している³³⁾。



ここで MOTIONAL の代わりに, 移動のみを表示する意味要素を LOCOMOTE で, POSITIONAL UP の代わりに, 移動の方向性を表示す

る意味要素を UPWARD で表示し, McCawley の記述の方式を用いるならば, *rise* の語彙前の構造は, 次の様なものになるであろう。



fall は, 「下への移動 (downward locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*fall* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を DOWNWARD で表示することができる。

vomit は, 「外への移動 (outward locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*vomit* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を OUTWARD で表示することができる。

drink は, 「内への移動 (inward locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*drink* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を INWARD で表示することができる。

sail は, 「前方への移動 (forward locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*sail* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を FORWARD で表示することができる。

back は, 「後方への移動 (backward locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*back* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を BACKWARD で表示することができる。

face は, 「(何かの) 前への移動 (frontward locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*face* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を FRONTWARD で表示することができる。

hide は, 「(何かの) 後への移動 (hindward locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*hide* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を HINDWARD で表示することができる。

skid は, 「横への移動 (sideward locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*skid* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を SIDEWARD で表示することができる。

cross は、「(何かを) 横切る移動 (crosswise locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*cross* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を CROSSWISE で表示することができる。

direct は、「(何かの) 方への移動 (locomotion toward a given object)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*direct* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を TOWARD で表示することができる。

carry は、「ある場所から他の場所への移動 (transilient locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*carry* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を TRANSILIENCE で表示することができる。

stab は、「(何かを) 貫通する移動 (penetration)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*stab* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を PENETRATION で表示することができる。

arrive は、「(何かに) 帰着する移動」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*arrive* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を TERMINAL で表示することができる。

over は、「(何かを) 超越する移動 (super-locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*over* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を SUPER で表示することができる。

rotate は、「(何かの回りを) 回る移動 (circumvolution)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*rotate* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を CIRCUM で表示することができる。

pass (by) は、「(何かの) 傍らを通過する移動 (alongside locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*pass (by)* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を ALONG-SIDE で表示することができる。

cling は、「(何かに) 付着する移動 (addition)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*cling* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を ADDITION で表示することができる。

leave は、「(何かから) 離れる移動 (separation)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*leave* の編入しているこの移動の方向性に

関する意味要素を SEPARATION で表示することができる。

wander は、「方向の定まらない移動 (indefinite locomotion)」という不定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*wander* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を INDEFINITE で表示することができる。

stretch は、「一次元的移動 (one dimensional locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*stretch* の編入しているこの移動の方向に関する意味要素を EXTENSION で表示することができる。

spread は、「二次元的移動 (two dimensional locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*spread* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を EXPANSION で表示することができる。

swell は、「三次元的移動 (three dimensional locomotion)」という一定の方向性を持った移動を表わす動詞である。*swell* の編入しているこの移動の方向性に関する意味要素を DILATATION で表示することができる。

以上移動動詞の編入していると考えられる方向性に関する意味要素を分析したが、これらの意味要素と LDCOMFE で表示した意味要素を用いるならば、すべての移動動詞に、その方向性と移動性に関する明示的な構造記述を与えることが可能となる。

2.2.2. 静止動詞の意味要素

静止動詞は、既に考察した様に、場所内部的動作を表わす動詞である。静止動詞については、位置に際して、移動動詞の方向性を表す意味要素が編入されていると考えられる。Gruber は、*be* に関して、次の様にその語彙項目エントリーを与えている³⁴⁾。

- (11) V
 |
 { IDENTIFICATIONAL AT NP }
 { POSITIONAL }
 # *be* #

また、*surround* については、次の様に記述している³⁵⁾。

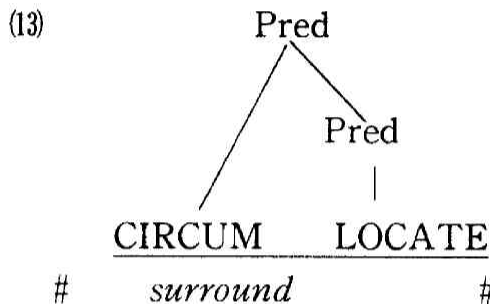
- (12) V
 |
POSITIONAL AROUND

surround

#

be は存在のみを表示している動詞と考えられる。そしてこの意味要素を LOCATE で表示できよう。*surround* は、「(ある物を)取り巻く位置 (circum-position)」という一定の位置性を持った静止動詞である。すなわち, *surround* は、この特定の位置性を編入している静止動詞と考えられる。

surround の編入しているこの位置性に関する意味要素を CIRCUM で表示するならば、*surround* の語彙前の構造は次の様なものとなろう。



ラテン語の動詞 *superesse* は、「上部の位置 (upper-side position)」という一定の位置性を持った静止動詞である。*superesse* の編入しているこの位置性に関する意味要素を UPPER-SIDE で表示することができる。

ラテン語の動詞 *subesse* は、「下部の位置 (lower-side position)」という一定の位置性を持った静止動詞である。*subesse* の編入しているこの位置性に関する意味要素を LOWER-SIDE で表示することができる。

ラテン語の動詞 *inesse* は、「内部の位置 (inside position)」という一定の位置性を持った静止動詞である。*inesse* の編入しているこの位置性に関する意味要素を INSIDE で表示することができる。

ラテン語の動詞 *excubāre* は、「外部の位置 (outside position)」という一定の位置性を持った静止動詞である。*excubāre* の編入しているこの位置性に関する意味要素を OUTSIDE で表示することができる。

ラテン語の動詞 *praeesse* は、「前部の位置 (foreside position)」という一定の位置性を持った静止動詞である。*praeesse* の編入しているこの位置性に関する意味要素を FORESIDE で表示することができる。これを反対に「後部の位置 (backside position)」を表わす意味要素が BACK-SIDE である。

adhere は、「(何かに) 付着している (adhesion)」という一定の位置性を持った静止動詞である。*adhere* が編入しているこの位置性に関する意味要素を ADHESION で表示することができる。

absent は、「(何かからの) 隔離 (segregation)」という一定の位置性を持った静止動詞である。*absent* の編入しているこの位置性に関する意味要素を SEGREGATION で表示することができる。

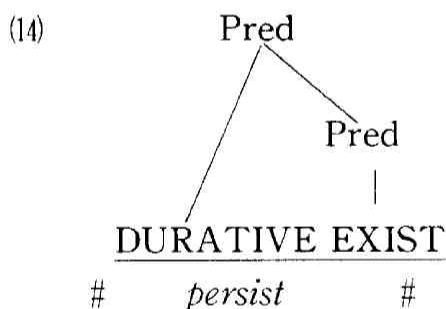
scatter は、「位置不定 (indefinite position)」という不定の位置性を持った静止動詞である。*scatter* の編入しているこの位置性に関する意味要素を INDEFNITE で表示することができる。

以上静止動詞の編入していると考えられる位置性に関する意味要素を分析したが、これらの意味要素と LOCATE で表示した意味要素とを用いるならば、静止動詞にその位置性に関する明示的な構造記述を与えることが可能となる。

2.2.3. 動作態様に関する意味要素

動作の経過は時間的推移の仕方の言語的把握あるいは行為の発展段階の客観的表示を動作態様 (Aktionsart) と名付ける³⁶⁾。

persist (=to continue to exist) は、動作状態の継続を表わす。これを図示すれば、 \longrightarrow となる。この動作態様を継続態 (durative) と名付ける。この継続態の意味要素を DURATIVE で表示し、存在を表わす動詞の意味要素を EXSIT で表示するならば、*persist* の語彙前の構造は次の様になるであろう。



begin は、開始の段階を表わす。これを図示すれば $\bullet \longrightarrow$ となる。この動作態様を起動態 (inchoative) と名付ける。*begin* の持っているこの動作態様に関する意味要素を INCHOATIVE で表示することができる。

settle (=to close up) は、終了の段階を表わす。これを図示すると $\longrightarrow \bullet$ となる。この動作態様を結果態 (resultative) と名付ける。*settle* の持っているこの動作態様に関する意味要素を RESULATIVE で表示することができる。


beat は、打票の動作が反復継続する過程を表わす。これを図示すれば、


……→となる。この動作態様を反復態 (iterative) と名付ける。*beat* の持っているこの動作態様に関する意味要素を ITERATIVE で表示することができる。

intermit (=to stop or pause at intervals) は、動作が間を置いて繰返される過程を表わす。これを図示すれば→||→||→となる。この動作態様を repetitive と名付ける。*intermit* の持っているこの動作態様に関する意味要素を REPETITIVE で表示することができる。

hit は、一回の瞬間的動作を表わす。これを図示すれば・となる。この動作態様を一回態 (semelfactive) と名付ける。*hit* の持っているこの動作態様に関する意味要素を SEMELFACTIVE で表示することができる。

glance (=to read rapidly) は、限界のある動作を表わす。これを図示すれば、(→) となる。この動作態様を限界態 (delimitative) と名付ける。*glance* の持っているこの動作態様に関する意味要素を DELIMITATIVE で表示することができる。

wax に to increase in extent, quantity, intensity, power, etc は、強度が次第に強まることを表わす。これを図示すればとなる。この動作態様を増加態 (augmentative) と名付ける。*wax* の持っているこの動作態様に関する意味要素を AUGMENTATIVE で表示することができる。

dwindle (=to become smaller and smaller) は、強度が次第に弱まることを表わす。これを図示すれば、となる。この動作態様を減衰態 (attenuative) と名付ける。*dwindle* の持っているこの動作態様に関する意味要素を ATTENUATIVE で表示することができる。

hammer (=to pound forcefully) は、打撃の動作の強度が強いことを表している。この動作態様を強意態 (intensive) と名付ける。*hammer* の持っているこの動作態様に関する意味要素を INTENSIVE で表示することができる。

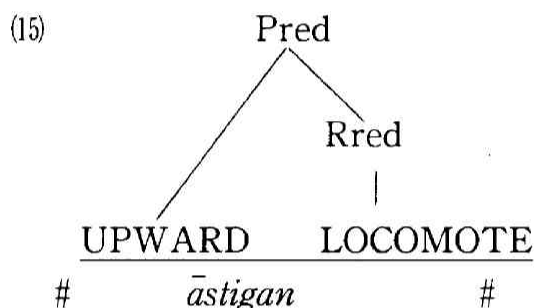
tip (=to strike gently) は、打撃の動作の強度が弱いことを表している。この動作態様を縮小態 (diminutive) と名付ける。*tip* の持っているこの動作態様に関する意味要素を DIMINUTIVE で表示することができる。

3.1. 移動を表わす OE 派生動詞、複合動詞

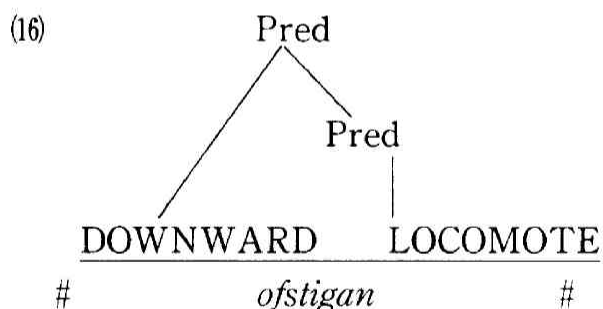
前節で考察した様に、単純移動動詞の中には、移動の方向性を編入して

いるものがある。単純移動動詞が接頭辞あるいは動詞前接と結合して語彙前の構造を比較分析することによって、接頭辞あるいは動詞前接の意味と機能を明らかにすることができる。

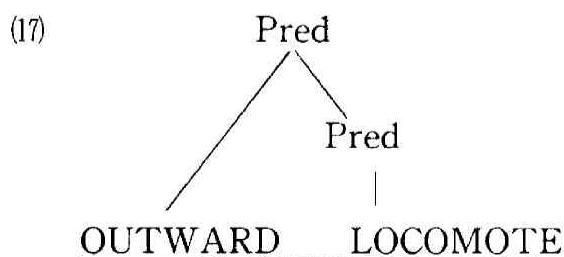
stigan は, *pā hē tō holme stāg.* (Beowulf, l. 2362) の用例では, *to ascend*, あるいは *to descend* を合意しないで, 移動のみを表している。接頭辞 *a* と合して *āstigan* となると, 「上方への移動」を表わして *to ascend* の意となる。ex. *Dā āstāb Apollorius on pæt dōmestle on ðāre strāete.* (Apollonius of Tyre)。この意味を持つ *āstigan* の語彙前の構造を示せば次のようになるであろう。



stigan が動詞接 *of-* と合して *ofstigan* となると, 「上方への移動」を表わして, *to descend* の意となる。この意味を持つ *ofstigan* の語彙前の構造を示せば, 次のようになるであろう。

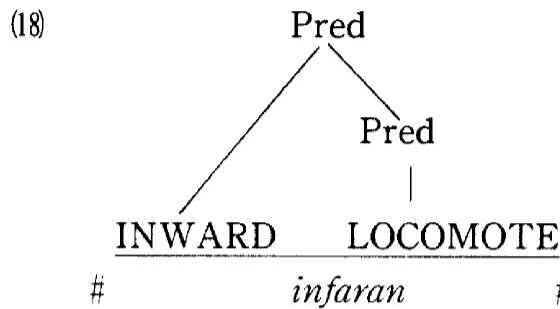


faran は, *to go* を意味する移動動詞である。接頭辞 *ā-* と合して, *āfaran* となると「外への移動」を表わして *to go out* の意となる。この意味を持つ *āfaran* の語彙前の構造を示せば次のようになるであろう。

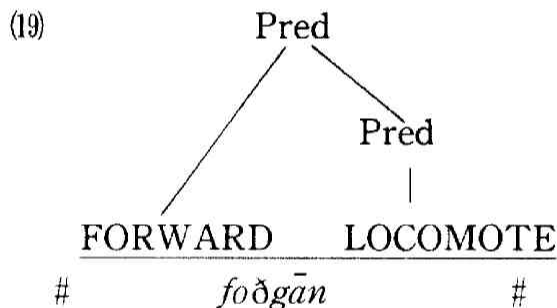


āfaran

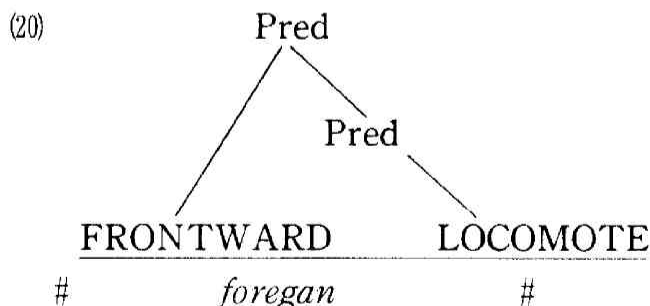
faran が動詞前接 *in-* と合して, *infaran* となると, 「内への移動」を表わして *to enter* の意となる。この意味を持つ *infaran* の語彙前の構造を示せば, 次の様になるであろう。



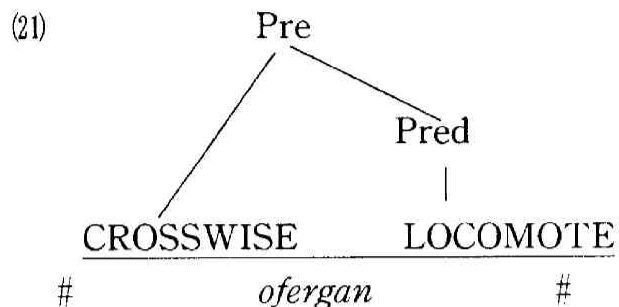
gān は, *to go* を意味する移動動詞である。*gān* が動詞前接 *forð-* と合して *forðan* となると, 「前方への移動」を表わして, *to proceed* の意となる。この意味を持つ *forðgān* の語彙前の構造を示せば, 次の様になるであろう。



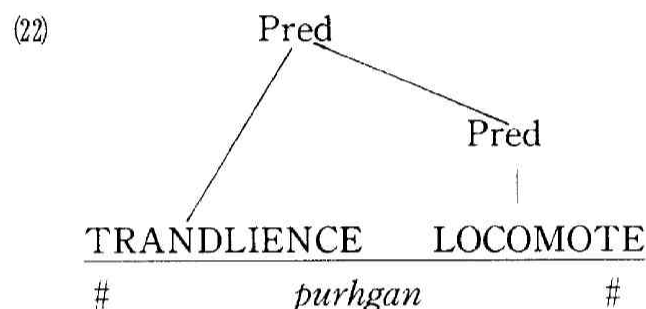
gān は, 動詞前接 *fore-* と合して *foregān* となると, 「(何かの) 前への移動」を表わして *to precede* の意となる。この意味を持つ *foregan* の語彙前の構造を示せば次の様になるであろう。



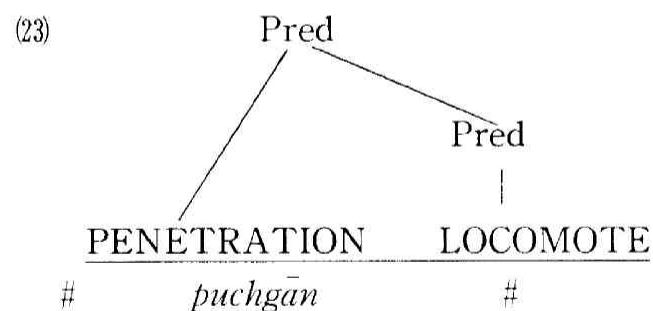
gān は, 動詞前接 *ofer* と合して *ofergan* となると, 「(何かを) 横切る移動」を表わして, *to cross* の意となる。この意味を持つ *ofergān* の語彙前の構造を示せば, 次の様になるであろう。



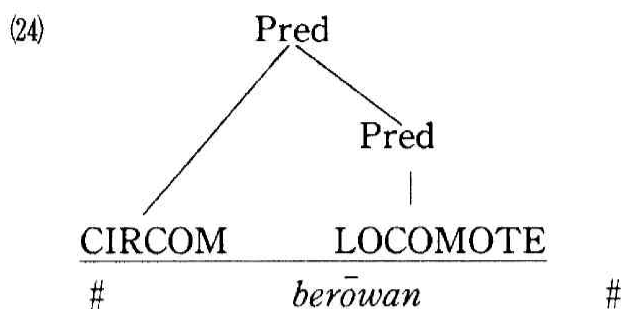
gān は、動詞前接 *purh-* と合して、*purh-gān* となると、「地点間の移動」を表わす。この場合 *purhgān* は、主語に動作主をとり、経過を表わす対格目的語を取る。この意味を持つ *purhgān* の語彙前の構造を示せば次の様になるであろう。



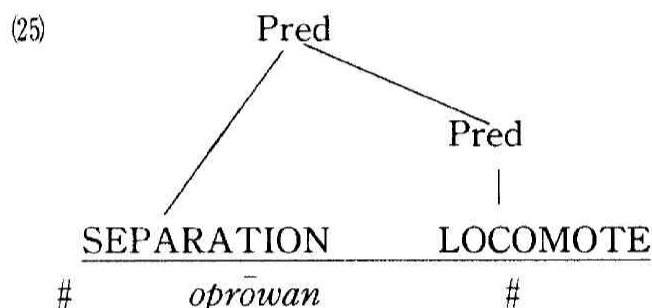
purhgan が武器などを表わす主題 (*theme*) と対格となると、「(何かを) 貫通する移動」を表わす。この意味を持つ *purhgān* の語彙前の構造を示せば、次の様になるであろう。



rōwan は、to raw という水平移動を表わす移動動詞であるが、接頭辞 *be-* と合して *berōwan* となると、「(何かの回りを) 回る移動」を表わす。この意味を持つ *berōwan* の語彙前の構造を示せば、次の様になるであろう。



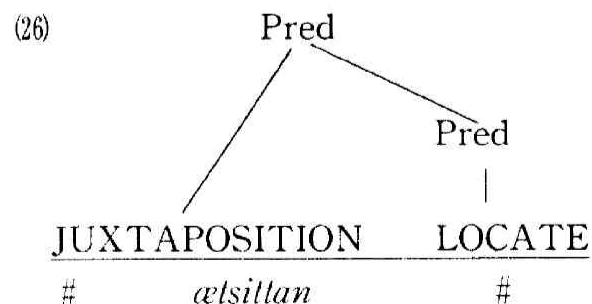
rōwan が、動詞前接 *oð-* と合して、*oprōwan* となると、「(何かから) 離れる移動」を表わす。この意味を持つ *oprōwan* の語彙前の構造を示せば、次のようになるであろう。



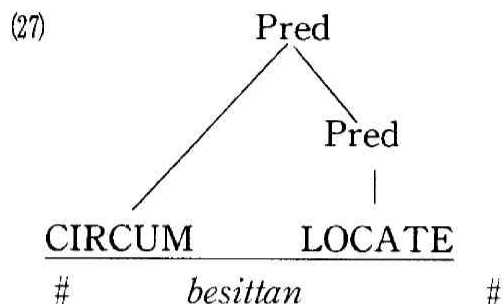
3.2. 静止の位置を表わす OE 派生・複合動詞

既に考察した様に、単純移動動詞の中には、移動の方向性を編入しているものが少なくないのであるが、単純静止動詞は、位置性を編入しているものは殆どなく、接頭辞や動詞前接との結合によって、位置を限定される。OE においては、動詞の位置を限定する機能を持つ接頭辞、動詞前接は多くない。

sittan が、動詞前接 *æt-* と合して *æsiwan* となると、to sit by という意味になり、「並置の位置」を表わす静止動詞になる。この「並置の位置」の位置性に関する意味要素を JUXTAPOSITION で表示することができる。これを用いて *ætsittan* の語彙前の構造を示せば次のようになるであろう。



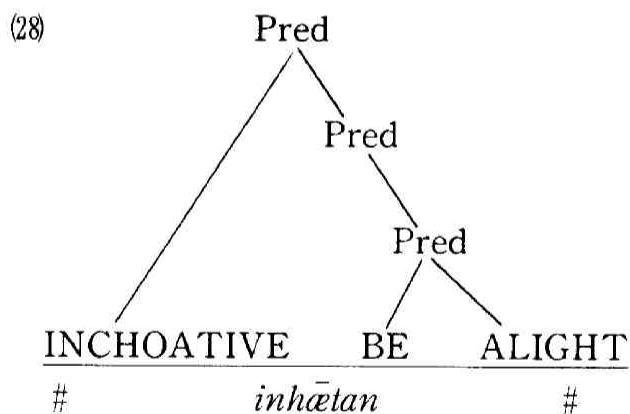
sittan が接頭辞 *be-* と合して *besittan* となると *to sit round* という意味になり、「(ある物を) 取り巻く位置」を表わす静止動詞になる。この意味を持つ *besittan* の語彙前の構造を示せば、次の様になるであろう。



3.3. 副語彙的添加の型

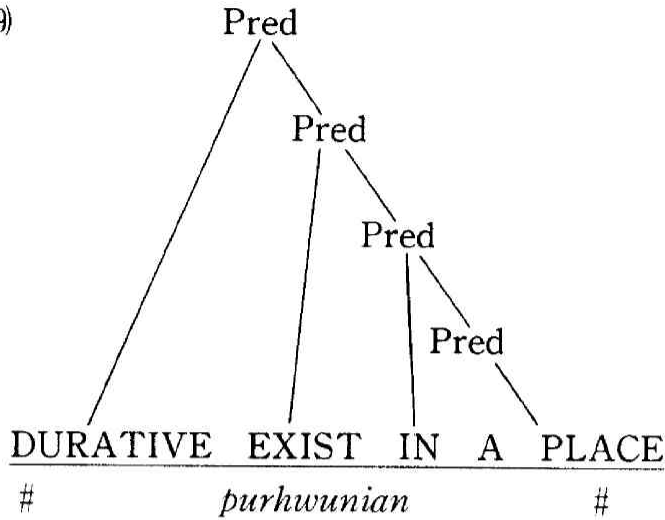
既に述べた様に、動作態様を限定する接頭辞、動詞前接の添加を副語彙的と名付ける。OE にあっては、2.2.3. で検討した全ての動作態様をこの型で見出すことはできない。

hætan は、*to heat* という意味の動詞であるが、動詞前接 *in-* と合して *inhætan* となると、その動作態様は起動態を示す。この動作態様を持つ *inhætan* の語彙前の構造を示せば次の様になるであろう。



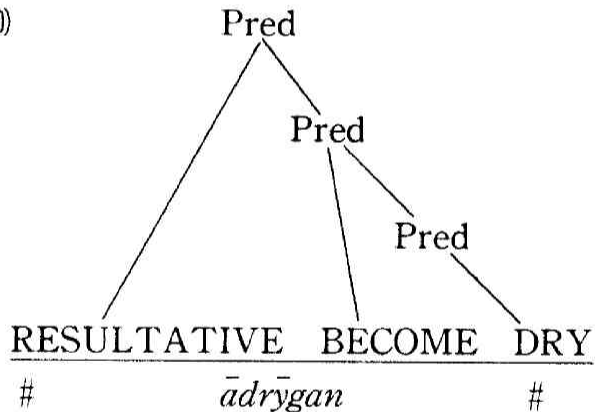
wunian は、*to abode* という意味であるが、動詞前接 *purch-* と合して *purhwunian* となると *to abide continuously* という意味になって、その動作態様は接続態を示す。この動作態様を持つ *purhwunian* の語彙前の構造を示せば、次の様になるであろう。

(29)

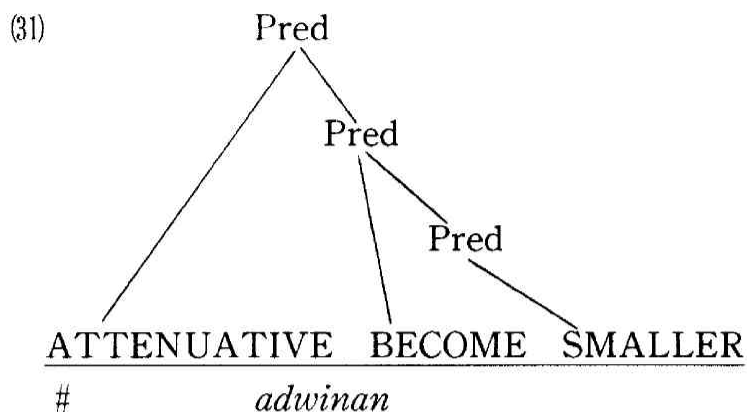


drygan は, to dry という意味であるが, 接頭辞 \bar{a} - と合して $\bar{a}drygan$ となると, to dry up という意味になって, その動作態様に結果態を示す。この動作態様を持つ $\bar{a}drygan$ の語彙前の構造を示せば, 次の様になるであろう。

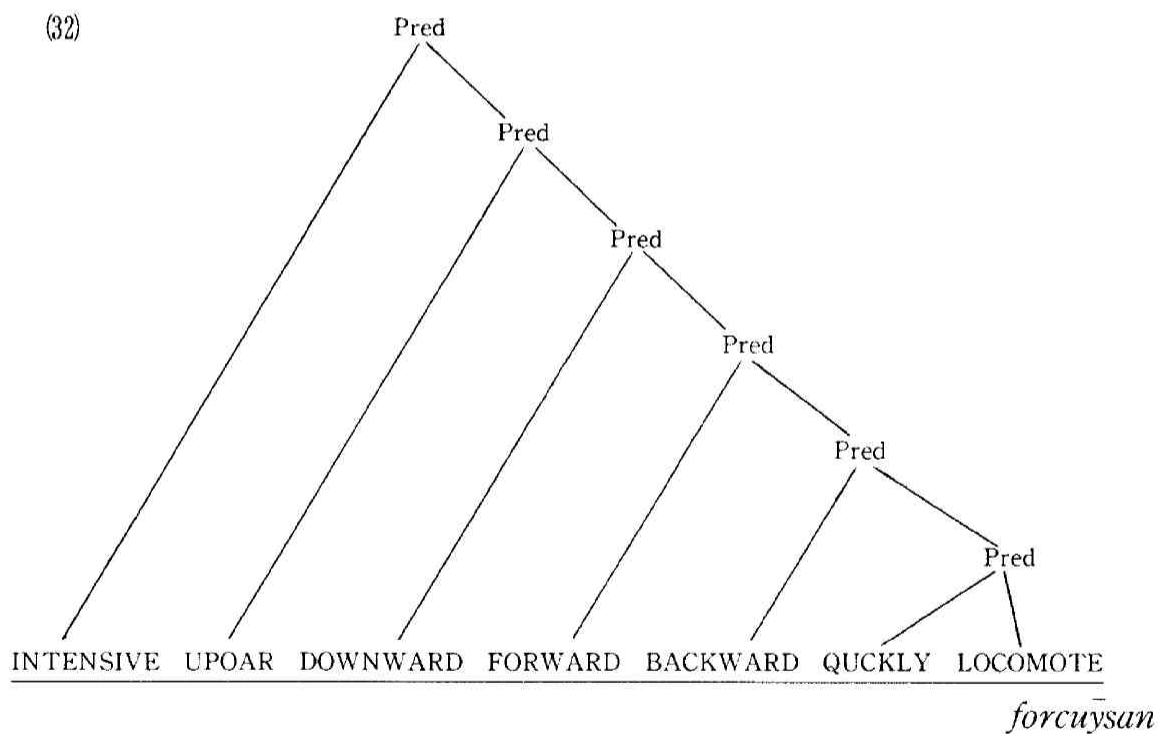
(30)



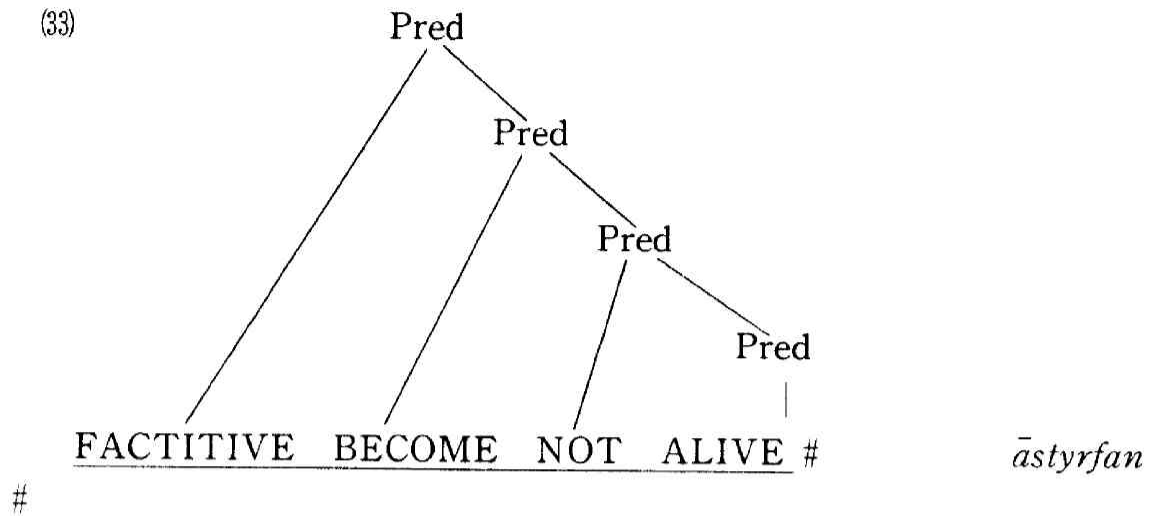
dwinan は, to dwindle という意味であるが, 接頭辞 \bar{a} - と合して $\bar{a}dwinan$ となると, to dwindle away という意味になって, その動作態様は減衰態を示す。この動作態様を持つ $\bar{a}dwinan$ の語彙前の構造を示せば, 次の様になるであろう。



cwýsan は, to shake という意味であるが, 動詞前接 *for-* と合して *for-cwýsan* となると, to shake violently という意味になって, その動作態様は強意態を示す。この動作態様を持つ *forcuýsan* の語彙前の構造を示せば, 次の様になるであろう。



接頭辞 \bar{a} -を持つ $\bar{a}styrfan$ は, to hill という意味で, その動作態様は作為態を示す。この動作態様を持つ $\bar{a}styrfan$ の語彙前の構造を示せば, 次の様になるであろう。



4.1. まとめ

造語論の目的は、語形成の過程に、形態的および意味の両面から、明示的に完全な構造記述を与えることである。伝統文法では、個々の接頭辞および動詞前接の意味と機能についての記述は存在した。生成意味論の理論と方法は、語形成の過程に体系的構造記述を与えるという目的に有効であると考えられる。この理論と方法に基づいて、本稿で行った様に、移動動詞の方向性、静止動詞の位置性、動作態様について分析し、そして設定された意味要素を用いて構造記述をするならば、古代英語の接頭辞、動詞前接を持つ派生動詞、複合動詞の内的意味構造が明らかにされる。

〔完〕

〔註〕

- 1) Henry Sweet, *Collected Papers of Henry Sweet*, p. 31.
- 2) Ferdinand de Saussure, *Course in General Linguistics*, p. 135.
- 3) Stephen Ullmann, *The Principles of Semantics*, pp. 29–31.
- 4) Ibid. p. 39.
- 5) Ibid. pp. 33–34.
- 6) Hans Marchand, *The Categories*
- 7) Erhard Agricola, et al. (eds.) *Kleine Enzyklopädie, Die deutsche Sprache*, p. 423.
- 8) Herbert Koziol, *Handbuch der englischen Wortbildungslehre*, p. 19.
- 9) Otto Jespersen, *A Modern English Grammar, Part VI*, pp. L7–158.
- 10) Ibid. p. 137.

- 11) Otto Jespersen, *MEG*, Part II, p. 223, Part VI, pp.120—121.
- 12) Eugene A. Nida, *Morphology*, p. 201.
- 13) *Ibid*, p. 99.
- 14) Leonard Bloomfield, *Language*, p. 222.
- 15) Eugene A. Nida, *Morphology*, p. 201.
- 16) *Ibid*, pp. 94—95.
- 17) Eugene A. Nida, *A Synopsis of English Syntax*, p. ix.
- 18) Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, p. 4.
- 19) *Ibid.*, p. 65, p. 136.
- 20) Jeffrey S. Gruber, *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, p. 1.
- 21) *Ibid.*, p. 74.
- 22) Paul M. Postal, 'On the Surface Verb "Remind"', In Fillmore and Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*, pp. 232—234.
- 23) Joseph Wright, *Old English Grammar*, pp. 329—332.
- 24) 24) Randolph Quirk and C. L. Wrenn, *An Old English Grammar*, pp. 109—119.
- 25) Eugene A. Nida, *Morphology*, p. 1.
- 26) *Ibid.*, p. 81.
- 27) Randolph Quirk and C. L. Wrenn, *An Old English Grammar*, pp. 104—119.
- 28) Charles E. Townsend, *Russian Word-Formation*, p. 118.
- 29) Gregory K. Jember, *English-Old English, Old English-English Dictionary*, p. xviii.
- 30) Peter Jørgensen, *German Grammar*, pp. 112—138.
- 31) A. V. Isayenko, *Die russische Sprache der Gegenwart*, p. 421.
- 32) 井桁貞敏, 「アスペクト研究序説」, 言語研究, p. 115.
- 33) Jeffrey S. Gruber, *Lexical Structures in Syntas and Semantics*, p. 29.
- 34) Jeffrey S. Gruber, *Lexical Structures in Syntax and Sementics*. p. 145.
- 35) *Ibid*, p. 48.
- 36) Erhard Agricola et. al (eds.) *Kleine Enzyklopädie, Die deutsche Sprache*, p. 865

〔引用文献〕

- Agricola, Erhard let al eds. *Die deutsche Sprache*, Leipzig, 1970.
 Bloomfield, Leonard. *Language*, London, 1962.
 Chomsky, Noam. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass. 1965.
 Gruber, Jeffrey S. *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, Amsterdam, 1976.
 井桁貞敏, 「スラヴ語の動詞アスペクト」
 言語研究 13巻, 1949
 ———, 「アスペクト研究序説」言語研究, 11—20巻, 1951

- Isacenco, A. V. *Die russische Sprache dey Gegenwant*, Teil I. Halle, 1968
- Jamber, Gregory K. (ed.) *English-Old English, Old English-English Dictionary*, Boulder, Culorado, 1925
- Jespersen, Otto, *A Modern English Grammar*, 7 Vols. London, 1961
- Jørgenen, Peter, *German Grammar*, 3 Vols. New York, 1963
- Koziol, Vlenbert, *Handbuch der englischen Wortbildungslehre*, Heidelberg, 1972.
- Marchand, Hans, *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*. Mürsher, 1969.
- Nida, Eugene A. *A Synopsis of English Suyntax*. Norman, 1964.
- , *Morphology*, Ann Arbor, 1965
- Postal, Paul M. "On the Surface Verb 'Remind'", In Fillmore and Langendoen (eds.) *Studies in Linguistics*, pp. 181—272, New York. 1971
- Quirk, Randolph, and C. L. Wrenn, *An Old English Grammar*, New York, 1958
- de Saussure, Ferdinand, *Course in General Lingustics*, New York, 1966.
- Sweet, Henry, *Collected Papers of Henry Sweet*. London, 1913
- Townsend, Charles, E. *Russian Word-Formation*, New York, 1968
- Ullman, Stephen, *The Principles of Semantics*. Oxford, 1967
- Wright, Joseph, *Old English Grammar*. London, 1961